

北辺の劇創り・その二

《発見くアポイの夢く》が結ぶ様似と斜里

菅村 敬次郎

はじめに

昨年、PROBE 第一〇号に「北辺の劇創り」と題して拙文を載せて頂いた。オホーツク海と日本海を俯瞰して北海道における地域の演劇創りを探る、という趣旨の一文でした。

さてその「北辺の劇創り」を「その一」とし、続きを「その二」として第一一号に載せたいという編集者からの電話である。突然でビックリ。しかも一月中に原稿をと言う。そんな無茶な、と思った。ところが更なるビックリ。なんと私は引き受けた。豪雪にやられて気が触れたのか、喜寿で呆けたか、その両方か。今夏何度も台風に襲われた異常気象続きの北海道だから滅茶苦茶なことに慣れてしまったらしいのです。

そういうわけで、今回は視点を少し広げ、太平洋日高沿岸・様似町の劇創りを紹介し、さらにはその上演脚本が日高の様似とオホーツクの斜里を結び付けることになった様子を「北辺の劇創り・その二」として報告します。

《発見くアポイの夢く》 様似公演

ところで、様似という町をご存知ですか。日高山系アポイ岳の麓にあります。と言ってもまだ分からないかも知れませんね。北海道の南端襟裳岬、森進一が「襟裳の春は何もない春です」と歌ったあの襟裳町がすぐ隣で

す。自治体のホームページによれば、その襟裳町が人口四九三三人（二〇一七年一月現在）。反対側の隣、浦河町は一六六八九人（二〇一六年一二月現在）。その間に挟まれているのが様似町。人口四五三一人（二〇一七年一月）。何も無い襟裳、よりもっと小さな町なのです。しかもなお人口は年々減少中。そんな超過疎に悩む町で、昼夜二回の演劇公演に五〇〇人以上の観客が来てくれたのですから先ずは大成功と言えます。これこそ本当の大ビックリでした。

上演したのは《発見くアポイの夢く》という拙作。四〇年前、菅村三七歳の時発表した戯曲です。北大一年生の若者が、日高山系アポイ岳で偶然新種の蝶々と出会ったという実話から生まれました。その話を耳にした私は大いに興味を抱き、さっそく北大昆虫研究会を訪れ、大学生の皆さんから新種発見の話をいろいろ伺いました。その聞き取り調査の中で、新種発見の喜び



や感動を味わいながらも、一方では発見してしまった責任の重さに悩む若者達の姿があることを知りました。発見者の鈴木茂さんは《迷っている》という言葉でその時の心境を語ってくれました。発見したこと、出会ったことが蝶にとつても人間にとつても喜びでありこの先の幸せに繋がるなら良いけれど、そうでないとしたら発見したことは大きな不幸を生み出したことになってしまふ、という悩みでした。その《迷い》の深さに私は心を打たれました。

作品のテーマはこの時決まりました。《自然と人間の触れあい、その喜びと感動、そして人間の責任》。もしかしたらこれはこの作品だけのテーマではない、これから先考え続けていくべき大きなテーマなのではないか、とりわけ大自然と共存していく北海道にとつては大切な「大テーマ」なのではないか、そう思いました。

一匹の蝶との出会いを通して北海道の大テーマを描く作品にしていきたい、そう思いました。

その後この作品の舞台となった日高山系アポイ岳は二〇一五年、ユネスコの世界自然遺産ジオパークに認定されました。地質学上珍しいむき出しの橄欖岩（かんらんがん）は太古の地形であり学術的にも貴重なものです。周囲にはキンロバイ、ヒダカソウ、サマニオトギリ、サマニユキワリ等々、高山植物群が豊かに自生しています。そしてそこには、何万年も氷河の中を生き抜いてきた《奇跡の蝶・神秘の蝶アポイヒメチャマダラセセリ》がのんびりと舞っています。この光景が世界の自然遺産として脚光を浴びることになったのです。このニュースを長年待ちに待っていた私は、テレビの前で思わず大声を上げ

てしまいました。

そして一昨年一二月、様似町長・坂下一幸氏が突然札幌の菅村宅へご来訪、「発見しアポイの夢」を是非様似で上演して頂きたい」との依頼を受けました。拙作再演の最高のチャンスがやって来たのです。

以来数ヶ月、慌ただしく準備に走り廻り、やっと様似公演へ漕ぎ着けました。二〇一六年八月二八日様似町中央公民館文化ホールにて、二ステージ。前日の二七日には、モデルとなった元北大生とのトークイベントも開催されました。スタッフ・キャスト総勢三〇名、三泊四日の遠征公演でした。

後日、様似町教員会生涯学習課主幹（社会教育担当）の児玉正敏氏より、以下のような報告を受け取りました。

この度縁あって、様似町のアポイ岳を舞台とした演劇が地元で上演され、町としてかけがえのない経験と財産が出来たと思っております。

約四〇年前に創られたこの演劇は、当時様似町では上演されることはありませんでしたが、平成二七年、様似町長が菅村先生宅を訪問し話が一気に進み、様似町中央公民館開館四〇周年記念事業として上演が決定。町では、次世代へ語り継ぐ意味を込め、一般客に加え



様似公演

町内小中学生の全校鑑賞を実施、アポイを愛する多くの地域住民が観賞しました。

四〇年も前のことで、子供には少し難しいかなとも思いましたが、劇団「群73」が生み出した素晴らしい舞台の世界に引き込まれ、小中学生に深い印象を残したことはアンケート結果からも明かです。類似の子供は幼稚園の頃から毎年アポイ岳に登っていて、身近な山の素晴らしさを改めて感じました。

また、折角の機会なので演劇のモデルとなった元北大生にトークイベントを引き受けて戴いた。公演の前日、鈴木茂・辻則男・永盛俊行・渡邊康之の四氏と作者菅村先生により市民向けのトークイベントが開かれました。発見当時のエピソードや全員が後の人生に大きな影響を受けたことなど、貴重なお話を伺いました。四〇年を経ての再会、再評価となる貴重なイベントでした。

上演成功の一方、アポイ岳は今、深刻な危機にあります。

自然環境の変化や盗掘が多発したり、動物を捕獲食



公演様子

用とすることにより、植生が変化し高山植物群落が減少する。そして、そこに棲息する「ヒメチャマダラセセリ」もこのままだと数年で絶滅する可能性もあると専門家は指摘します。それほど減少しているのです。住民有志の団体「アポイ岳ファンクラブ」や研究者、専門家、行政・関係機関と一体になってこの二〇年にわたり保護活動を続けてきましたが、状況は深刻化するばかりです。

自然を守り続けていくためには人々の広い理解と支持がなければなりません。今回は《演劇》という手段を通して多くの人に訴え、深く感じて貰うことが出来たと思います。

《発見〜アポイの夢〜》は、時を経てどんな場所でも上演されたとしてもあらゆる世代の人々に感銘を与えることが出来ると私は確信しています。

《発見〜アポイの夢〜》斜里中学校における上演

ところで、冒頭に述べた昨年度の本誌第一〇号では、オホーツク沿岸の斜里中学校の取り組みについて紹介しました。

斜里中学校では、二〇一四年度より秋の文化祭で「三つの学年がそれぞれ一時間前後の劇を創り互いに鑑賞しあつて競い合う。順位を決めるコンクールではないが全力で競い合う。」(PROBE第一〇号 一四頁)のです。

リーダーの教師である伊藤先生によれば「数年前までは「荒れた学校」だったという。ネットで調べるとスマホ使用時間が全道平均をはるかに超えていたらしい。《これでは駄目だ、皆で一つになり皆で熱中できる何かをや

ろう》という声が教師や父母や一部生徒達から沸き起こってきた。そして実現したのが春の体育祭であり秋の文化祭だったという。」(同 二五頁)。そして「この演劇創りの成功が自信と喜びを生み、更なる進化・工夫へ発展し来年度に向けて生徒達を動かした始めたようだ。最近、来年度もぜひ菅村脚本をという声が聞こえてくる。」(同 二六頁)とのことでした。

そして、二年間で《地底へ》、《あしたは天気》、《雨ふり小僧》、《ここは幸子の家です》を上演してくれた斜里中学校が、大変嬉しいことに、今年度は《発見〜アポイの夢〜》取り上げてくれたのです。

斜里中学校の伊藤俊也教諭より、「菅村脚本による演劇活動の集大成」という報告を受けましたので紹介しましょう。

このタイトルはいささか語弊があり、私は集大成と呼べるほど演劇に精通していない。ましてや菅村敬次郎先生の脚本を自由自在に扱える程の知識や指導技量など備えていないのが現実だ。しかしこんな素人でも何とかなってしまうあたりが菅村脚本の偉大なところである。

私は中学校教員であり、自分が所属する斜里中学校には演劇部はな



伊藤先生

い。劇とえば、文化祭で取り組む演劇のみである。しかし、この期間限定、予算も限られた枠の中でもよそに負けない立派な作品ができないだろうか。北海道が抱えてきた政治的社会的問題を中学生が演じ、訴えることができたならば、それは間違いなく学校の源となる財産となり、生徒の大きな自信に繋がり活力の源となるだろう。そう考えて取り組んだのが菅村敬次郎著「あしたは天気」戯曲集からの作品だ。そして今年、その演劇活動が三年目を迎えた。一作目は「地底へ」、二作目に「ここは幸子の家です」この年は菅村先生自ら来斜里し、観覧いただいた。もちろんど素人の演劇を満足頂いたわけではない。しかし努力を認めていただいた先生の度量の大きさに感服したので覚えている。一年生から菅村脚本で育ってきた生徒も子供っぽさが抜け、それなりに役者として成長してきた。今年脚本集から何を選定しようか思案していたが、相変わらず決断力がない。こうなるとすぐに師匠を頼ってしまう人任せの自分。自信がないから仕方ないと言い聞かせ菅村先生に電話をかけた。すると「発見〜アポイの夢〜」の公演が来週あると言う。菅村先生自身も同行するとの話だった。これは願ってもない。公演場所の様似町は位置的に斜里からは遠く、七時間以上はかかるだろうが実際に先生が薦める演劇を生で拝めるのである。遠くて大変だからと気遣う先生をよそに遠征の準備を進めた。公演が行われたのは地域の公民館らしきところ。休日だが、町を挙げての催しだったらしく、町内の小中学生が大勢詰めかけていた。今回は劇中に作者の先生自身も登場するという。内容は昆虫研究会の北大生が珍しい蝶を見つけ天然記念物に指定されるのだ

が、やがてマニアに乱獲されるといふストーリー。劇はその渦中にいる若者達の高揚と葛藤を描いたモデルが存在する実話である。私が今任んでいる知床斜里も自然遺産登録から十年が経ち、乱獲こそないが、自然破壊が問題提起されている。これこそ最終作に相応しいと思ひ、細かくメモをとつていく。現場で菅村先生と涙の対面を果たし、少しばかりのインタビュをした後、急いで帰路に着いた。取り組むことは山程あるが、まずは中学生用に脚本を軽くする作業が最優先である。師匠からお叱りを受けるかもしれないが、今までも中学生に分かり易く優しい表現と構成に若干の直しをしている。今回は時間の短縮も含め三週間ほど。だが難易度の高い演劇こそ取り組む価値がある。私には自信があった。自分にはなく生徒の方に自信があったのである。彼らは一年生から菅村脚本で成長を遂げた、いわば精鋭。彼らは私の想像を超えて自由な発想で演技に磨きをかけた。私は練習で感想を述べれば良いだけ。「何かわかりにくいなあ」「演技にキレがないよね」など、無責任とも呼べる指導で生徒は自分達で考え工夫し劇を完成させていった。嬉しいことに今年も先生にお越しいただけた。しかも公演前日に役者への直接指導まで実現した。先生からの私では思ひもよらない助言が入る。なるほど、これがプロかと感心したが、尊敬する人からのアドバイスは明らかに中学生を高校生顔つきにさせ、さらに深く劇の世界へのめり込ませていったのである。翌日生徒達が見せた迫真の演技は、町内で劇団員として活動する人々をも唸らせるまでに見事なものであった。今回、五作品目にして初

めて先生からお褒めの言葉をいただいた。この上なく嬉しかった。

演劇は不思議な魅力がある。書物からの知識だけでは得られない潤いを心に与えてくれる。一冊の本と菅村先生との出会いが私の財産となり、この斜里に演劇一時代を築いたのである。

今年集大成を終えた生徒の一人が高校から本格的に演劇の世界で生きていきたいと願ひこの四月から札幌山の手高校への進学が決まった。同校には、道内屈指の演劇指導者・中瀬先生がいらつしやる。その門を叩くことになったのである。

今後も生徒の人生に飛躍の契機を示唆し、将来へ前進させていくような演劇活動がこの斜里で続けてくれればいい、そう心から願っている。

また、斜里中学校の保護者、小暮千秋氏からの「三年間の『菅村作品』と息子」という文章も紹介しましょう。

「今日、学校で土下座した」夕食時、息子の言葉にびっくりして箸が止まる。「何か悪さを？」「まさか、いじめ？」問いただと、演劇の一シーンだという。その息子の土下座から始まるというではないか。そんな大役！しかも土下座！つい心配になって、「ちよつと、やって



斜里中学校公演

みて」と言う素直にやつて見せてくれた息子。「うん、上手上手」……って、いったい、どんな芝居なの！そんな調子で始まった、中学生の息子の「文化祭期間限定」役者生活。聞けば、夕張炭鉱の事故を題材にしたシリアスな『地底へ』という劇だという。そんな難しいテーマで大丈夫だろうか。しかも、厳しいことで有名な伊藤先生だという。ついていけるだろうか。心配しつつも迎えた本番は、これが中学生、しかも一年生の芝居か！と驚く完成度。周りのお母さんたちと思わず手を取り合い喜びと感動を分かち合いながら、来年もぜひ演劇をやつてほしい！と願わずにはいられなかった。

願いが通じ次の年も炭鉱事故を題材にした『こは幸子の家です』に出演。この年は脚本家の菅村敬次郎先生が文化祭にお見えになり直接、ご講評をいただくなど、生徒たちも感激し、私も広報誌でインタビューをさせていただくなどとても印象深い年だった。

そして最後の今年は『発見！アポイの夢』。年々、親としての心配よりも観客としてのワクワク感の方が増していった。それだけ、キャスト全員が中学生らしい照れや恥ずかしさを捨て、真剣に芝居の世界に入っていたので観客も安心してその世界に浸ることができたのだと思う。三年間指導してくださった伊藤先生はじめ先生方には感謝しかありません。この文化祭の演劇活動を通して、確実に友人との信頼関係を築き、他人からどう見えるかを気にするよりも、揺るがない自分自身を作る大切さを知り、何よりも毎年の土下座役で土下座が上手くなった息子は、私の自慢です。

おわりに

最近劇場で配られるチラシ・プログラムはなんとともつまらない。派手な色彩だが内容がなさ過ぎる。役者の顔やら自己宣伝やら、質の悪い駄洒落やら……

類似公演のプログラムは最近演劇公演ではお目にかかれない充実した一冊でした。教育委員会生涯学習課主幹（社会教育担当）の児玉正敏氏の手による編集。とくに、A4版一杯を使つて書かれた英文の説明文に驚きました。なんでここに英文かと思つたところ、

①アポイはジオパークになったから世界からお客さんがやつて来る。とくに登山の愛好家は皆《世界中の山を登りたい》と思つている。彼らは必ずいつかはアポイへ来てくれる。この文章がどこかで眼に止まり、類似へくる切っ掛けになれば嬉しい。

②類似の小中学生の英語教育が始まった。その英語教材になれる内容だ。何度もヒメチャマダラセリと教室で出会い、英語も上達するし郷土愛も生まれて来る。

このことでした。素晴らしい教育、素晴らしい方法・発想だと思えます。ここで学んだ子供達が成長し、アポイ山頂お花畑への案内人になる日が待たれます。

類似の児玉主幹、斜里の伊藤先生、これら若々しい行動力とエネルギーに満ちた方々と出会えた《類似公演↓斜里公演》でした。

北海道の自然を守る次世代への橋渡しがしつかりと出来つつあります。